

Peter L. Berger・Thomas Luckmann
The Social Construction of Reality

現実の社会的構成

知識社会学論考

ピーター・バーガー・トーマス・ルックマン
山口節郎 訳

新曜社

Peter L. Berger and Thomas Luckmann
The Social Construction of Reality

A Treatise in the Sociology of Knowledge

Japanese translation rights arranged with Doubleday & Company,
Inc., New York through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

序 言

本書は知識社会学の体系的・理論的論文として書かれたものである。それゆえ、本書が企図しているのは知識社会学の発展に関して歴史的概説を行なうことでもなければ、社会学理論のあれこれの発展におけるさまざまな代表的人物について注釈をほどこすことでもなく、いわんやこうした人物や発展の間の統合はいかにして行なわれうるか、を示すことでもない。さらにまた、本書にはいかなる論争的意図もない。他の理論的立場に対する批判的注釈は（本文のなかではなく、注記のなかで）本書の主張を明らかにするのに役立つ場合にのみつけ加えておいた。

本書の主張内容の核心はII部とIII部（「客観的現実としての社会」および「主観的現実としての社会」）にみることできよう。前者は知識社会学の問題に関するわれわれの基本的理解を内容とするものであり、後者はこうした理解を主観的意識のレヴェルに応用し、それによって社会心理学の諸問題に理論的橋渡しを行なうものである。これに対し、I部の内容は、これを最もうまく表現するとすれば、「日常生活の現実性に関する現象学的分析を用いて主張の核心に迫ろうとする哲学的プロレゴメナである」と言えよである（「日常生活における知識の基礎」）。本来の社会学的主張のみに関心のある読者は、

この部分をとばしてその先を読んでみようという気持ちに駆られるかも知れない。しかしながら、そうした読者には、本書の全体を通じて用いられているいくつかの基本概念はI部においてその定義づけがなされている、ということをお告げしておかねばならない。

われわれの関心は歴史のものにあるのではない。しかし、われわれは知識社会学に関するわれわれの考え方が、従来、一般にこの学問によって理解されてきているものとなにゆえに、そしてまたどのように異なっているのかを明らかにしておく義務があるように思われた。この作業は序論で行なつてある。また、結びの部分では、われわれは社会学理論一般と経験的研究の一定の分野に対する本書の〈収支決算〉をわれわれがどのようなものとして考えているか、を示すために、若干の結論的見解を述べておいた。

われわれの主張の論理からして、ある程度の繰り返しは避けられなかった。その結果、いくつかの問題がI部では現象学的な括弧づけのなかでとり上げられ、II部では再びこれらの括弧がとりはずされてその経験的な発生への関心という点から考察され、さらにもう一度、III部で主観的意識のレヴェルにおいてとり上げられている。われわれは本書をなるべく読みやすいものにするよう心がけてはきたが、その内的な論理は崩さないようにした。それゆえ、避けられなかったこれらの繰り返しに対し、読者の御理解を乞いたいと思う。

イスラムの偉大な秘法家であったイブン・ウル・アラビは、ある自作の詩のなかで次のように叫んでいる——「おお、アラアの神よ、われわれを人名の大海から救いたまえ！」と。われわれもまた、われわれ自身の社会学理論の教科書のなかで、この叫びを何度もくり返してきている。したがって、われわ

れはわれわれの実際上の議論から一切の人名を省略することに決心した。それゆえ、実際の議論はわれわれ自身の立場をたえず表明したものととして読んでいただいで構わない。このため、「デュルケームによれば」とか「ウェーバーによれば」、あるいは「われわれはここでデュルケームには賛成するがウェーバーには賛成しない」、「この点に関してはデュルケームは誤解していたものと思う」等々といったことをたえず挿入することは省いてある。われわれの立場が無から生じたものでないことはどのページをみても明らかである。しかし、われわれはそれがその注釈のないしは総合的な側面から評価されるのではなく、それ自身の価値によって評価されることを望んでいる。それゆえ、われわれは参照事項はすべて巻末の注記のなかに入れておいた。これはわれわれがその恩恵に浴している原典とわれわれが共有するすべての主張（常に簡単にしか触れられてはいないが）についても同様である。このため、注記はかなり分量の多いものにならざるを得なかった。これは学術性なるものにもまつわるさまざまな儀礼に対して敬意を表するということではなく、むしろ先人が残してくれた遺産に対して謝意を表するということ要求に忠実に従ったまでのことである。

本書が実現することになったこの計画が最初できあがったのは、一九六二年の夏であった。それはオーストリア西部のアルプスの麓や（ときには）その山頂で行なわれた何回かのくつろいだ話し合いのなかで生まれてきた。それを本にするための最初の計画は一九六三年の初期に立てられた。当時の予定では、この計画には他にもう一人の社会学者と二人の哲学者が加わることになっていた。結局、他の参加予定者たちはさまざまな個人的事情からこの計画に積極的に参加することはできなくなったのであるが、われわれはたえず批判的意見を寄せてくれたハンスフリート・ケルナー（現在はフランクフルト大

学に在職）およびスタンリー・プルバーク（現在は高^{コロン}等^{フライ}実^{アクト}業^{ビテ}学^ニ校に在職）の両氏に対し、深甚の謝意を表しておきたい。

われわれが後期のアルフレッド・シュッツの研究にいくに多くを負っているかは、以下の論述の随所においておいおい明らかになっていくであろう。しかしながら、われわれはここでわれわれのものの考え方に及ぼしたシュッツの教えと著作の影響をはつきりと認めておきたいと思う。ウエーバーについてのわれわれの理解はカール・マイヤー（ニュー・スクール・フォア・ソーシャル・リサーチ、大学院在職）の教えを大きく受けてきており、デュルケムとその学派の方についてはアルバート・ザロモン（同校、大学院在職）の解釈に大きく負っている。ルックマンは、ホバート大学とともに教鞭をとっていたころ、そしてまたその他さまざまな機会を通じて、多くの実りある話し合いをもつことができたことを回顧しつつ、フリードリッヒ・テンブルック（現在はフランクフルト大学に在職）の考え方に対し謝意を表したいと思う。バーガーもまた、本書のなかにみられる考え方の発展に対し、たえず批判的関心を寄せてくれたクルト・ヴォルフ（ブランダイス大学）とアントン・ザイデルフェルド（ライデン大学）に対し、謝意を表しておきたいと思う。

こうした類の企画においては、妻や子どもをはじめ、法的立場のより曖昧な個人的友人に対し、彼らから受けたさまざまな無形の協力を記して労をねぎらうのがならわしになっている。もしこのならわしに逆らえるものなら、われわれは本書をプラント・フォラーベルクのある一人のヨードル歌手に捧げてもよいという気になってきている。とはいうものの、やはりわれわれはブリジッド・バーガー（ハンター大学）およびベニタ・ルックマン（フライブルグ大学）に対し感謝の意を表しておきたい。しかも

それは、学問とは無関係の私的な役割の遂行に対してではなく、社会科学者としての彼女たちの批判的論評と安易な納得を峻拒するその姿勢に対してである。

ピーター・バーガー

ニュー・スクール・フォア・

ソーシヤル・リサーチ大学院

トーマス・ルックマン

フランクフルト大学

目

次

序言

序論——知識社会学の問題…………… 1

I部 日常生活における知識の基礎

1章 日常生活の現実…………… 28

2章 日常生活における社会的相互作用…………… 43

3章 日常生活におけることばと知識…………… 53

II部 客観的現実としての社会

1章 制度化…………… 74

a 身体と活動…………… 74

b 制度化のはじまり…………… 82

c 沈黙化と伝統…………… 104

d 役割…………… 111

e 制度化の範囲とその様式…………… 121

2章	正当化……………	141
	a 象徴的世界のはじまり	141
	b 世界を維持するための概念機構	158
	c 世界を維持するための社会組織	176
III部	主観的現実としての社会	
1章	現実の内存在……………	196
	a 第一次的社会化	196
	b 第二次的社会化	209
	c 主観的現実の維持と変化	222
2章	内在化と社会構造……………	247
3章	アイデンティティ論……………	264
4章	身体とアイデンティティ……………	275
結論	——知識社会学と社会学理論……………	281

原注

289

新版訳者あとがき

315

序論および原注の人名索引

事項索引